



集団システム論

— 集団間対立の心理的原因とは？ —

システム論の基礎

2011年6月27日

担当：唐沢 穰

(心理システム系教授)



なぜ・・・

- 自分が所属する集団を応援したくなる？
- 自分の集団の仲間が得をするよう便宜をはかる？
- 自分の集団は優れて見える？
- よその集団には反感・敵意を感じる？



集団間の対立：その心理的起源

- なぜ、どのような心理的過程を経て、集団間には対立が生まれるのか？
- どのようにすれば対立を解消できるのか？
 - 社会構造的要因 ← 政治、経済、歴史
 - 感情(動機)的過程
 - 認知的過程



1. 集団間の競争関係

- 現実的利害の衝突

Realistic Group Conflict Theory

- 集団＝しばしば「目標」のもとに形成
- 「競争関係」に置かれることが多い
- 外集団＝内集団の目標達成を阻害
→ 悪感情・敵意、偏見



Sherifらの「サマーキャンプ実験」

- 12歳前後の少年たち
- “Eagles”, “Rattlers” に分かれる
- 第1段階: 集団間競争
 - 内集団ひいき、外集団への敵意
- 第2段階: 集団間接触
 - 競争激化
- 第3段階: 共通の「上位目標」
 - 集団間の友好的関係



2. 社会的アイデンティティーを求めて

- すべての内集団ひいきや集団間対立が「競争」に基づくわけではない
 - 同窓生、同郷人への「ひいき」
 - 女性の地位向上＝男性への「脅威」？
- 「うち」「そと」の区別がもたらす最小限度の効果とは？

最小集団状況 (Minimal group paradigm)

Tajfel ら (1971)

- 無意味な基準によるカテゴリー分け
e.g., Klee派 vs. Kandinsky派
- 集団内でも集団間でも、個人間の相互作用は最小限度に抑えられている
- 他の誰が、どの集団に属するかも知らない
- 「仲間」に得をさせても自分に帰ってくる保証はない
→それでも 内集団ひいき が起こる



“Tajfel matrix”

「得点を2人の個人に分配するとしたら、どの分配方が最も適切か？」

〇〇グループ No. xxx	4	5	6	7	8	9	10	11
△△グループ No. ///	11	10	9	8	7	6	5	4

〇〇グループ No. xxx	8	9	10	11	12	13	14	15
△△グループ No. ///	3	5	7	9	11	13	15	17

X

優れた存在

A

B

C

自分

F

E

D

Y

H

J

G

K

I

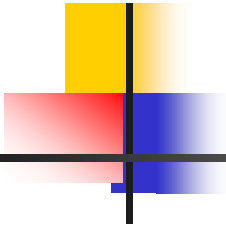


社会的アイデンティティ理論

Social Identity Theory

(Tajfel & Turner, 1979; 1986)

- 内集団 vs. 外集団の区別(カテゴリー分け)が顕著な状況で、「自己評価を高めたい」という動機づけを満たすためには？
 - 自分を「優れた／優勢な集団の一員」と見なせばよい
 - 内集団ひいき の原因

- 
- 社会的アイデンティティーのもたらす結果
 - 報酬分配での「ひいき」
 - 評価での「ひいき」
 - 集団内の類似性、集団間差異を強調
 - 集団内は相互に魅力を感じていると知覚
 - 集団成員としての「感情」



4. 集団成員としての感情

- 外集団に対する
 - 嫌悪
 - 脅威の知覚
 - 憐み、同情
 - 罪悪感 \leftrightarrow 非難
- いずれも、自己と集団との同一視(アイデンティティー)の強さに比例する(Mackie ら, 2000)



集合的罪悪感

- 自身が行った不当行為でないにもかかわらず、**集団の一員として罪悪感を覚える**

vs. 正当化

- 集団同一視が強いために、かえって不正行為への正当化が起こることがある

これを防ぐ要因: (Goto & Karasawa, 2011)

- 漠然とした「内集団」ではなく加害者集団と自己との同一視
- 他者の視点への注意



罪悪感表明・謝罪のタイミングは？

- どのような相手から、どのようなタイミングで謝罪されたら許す気になれるか
 - 集団間の謝罪、許し、宥和についての研究は始まったばかり



まとめ

- 「カテゴリー化」とその結果として生まれる「社会的アイデンティティ」という観点を取ることにより、葛藤の生起と低減の過程がうまく説明できる
- 人がどのような社会的アイデンティティを求めるかについて、さらに明らかにする必要がある